二葉館あれこれ Vol.14

天井の装飾から見た電気の普及

大広間

二葉館に入り、玄関の天井を見上げると、照明の上に円形の模様が見えます。これはシーリングメダリオンと呼ばれる天井飾りで、シャンデリアやペンダント照明を取り付ける際の装飾として用いられているものです。シーリングローズまたはシーリングセンターなどとも呼ばれています。メダリオンとは、壁やドアなどの上に取り付けられる飾りのことです。円形の浮き彫りや、立体的な装飾で、天井（シーリング）に使用するので、シーリングメダリオンと呼びます。以前は漆喰や石膏で作られていました。

川上貞奴邸でも使用されており、現在2階の展示室7（旧書斎）の天井にあるものは創建当時のものと考えられています。当初どの部屋で使用されていたのかは不明ですが、売却後、移築する前の保養施設として使われていた旧二葉荘では応接間で使用されていました。玄関や大広間の天井に使用されているものは、川上貞奴邸を設計施工したあめりか屋が同時期に手掛けた旧和田豊治別邸のものを参考に復元しています。

創建当時の天井飾り

川上貞奴邸は、福沢桃介の電気事業を推し進めるため、名古屋の財界人を招く迎賓館のような役割があったと考えられています。当然その建物には電気の有用性をしめすための仕掛けがふんだんに盛り込まれたと思われます。

招かれた客人たちが、車寄せから玄関を通り大広間に入ると、まず目に入るステンドグラス、そして高い天井、2階まで吹き抜けになっている大階段、これらが一度に目に入るようになっています。天井から下がる照明の上にあるメダリオンは、建物の優雅さをさらに際立たせたことでしょう。これらは訪れた人々の視点を高い位置にする仕掛けであり、電気による明かりをより強く印象づけるものとなったのではないでしょうか。

ろうそくや油を使用した日本の灯具は、場所も限定的でしかも横もしくは下からの明かりでした。電灯の普及により、上から明るく照らされることで日本人の生活は一変しました。活動時間が長くなることはもちろん、屋内での活動がよりしやすくなりました。

一方で失われた道具もあります。角筆（かくひつ）と呼ばれるその道具は、紙に凹凸を刻むことで筆記するもので、上からの光では読むことは困難です。鉛筆の普及で使用されなくなったことが大きな原因かと思いますが、光の当たり方による影響も少なくないと思います。明治天皇も使用していたといわれる角筆は、現在まったく使わなくなってしまったため、その形状すら判然としません。文書に刻まれているものがまれに見つかっていますが、意識してみないとわからないため、なかなか研究が進まないのが現状です。

このように電気の普及は、とても便利なものであるがゆえに、生活様式に大きな変化をもたらすものにもなったのです。

文化のぶらりさんぽみち ⑭

建中寺

名古屋市内には、名古屋城や徳川園をはじめ、尾張徳川家にゆかりある場所が多く存在します。東区筒井町にある建中寺もそのひとつです。文化のみち二葉館の南側にある大通り（外堀通り）を東へ十五分程歩くと、左手に大きな門が現れます。ここが徳興山建中寺です。建中寺は、徳川家康の九男で初代尾張藩主・徳川義直の菩提寺として、一六五一（慶安四）年に第二代藩主・徳川光友によって建立されました。以来、代々尾張徳川藩主の霊廟のあるお寺として大切にされ、現在でも地域の人々に親しまれています。

建造物自体も、名古屋市の指定文化財になっています。入り口の大きな門は「三門」（山門とも呼ばれる）といいます。建中寺に初めて訪れた人は、まずこの立派な門に驚くのではないでしょうか。三門は、敷地内でもっとも古く、創建当時からある建造物のひとつです。総檜（ひのき）造りで、屋根の部分には、瓦が葺いてあります。三間重層門という建築方式で階層があり、普段は見られませんが、二階部分には、釈迦牟尼（むに）仏を中心とした十六羅漢（悟りを開き、仏法を守る十六人の釈迦の弟子たち）像が納められています。

三門

本堂

本堂は、一七八五（天明五）年に大曽根で起きた大火の際、火のついた布団が飛んできて、屋根にまとわりついたことで全焼したといわれています。しかし、その二年後には、尾張藩の総力と住職の努力によって、ほぼ創建当時の姿で再建されました。以降、江戸時代の建築様式を現代に残しています。本堂に祀られている本尊の阿弥陀如来は、ただちに持ち出されたことで大火の被害をまぬがれ、創建当時からの姿を留めています。この本堂は、現在名古屋市内の木造建築物として最大級のものだそうです。当時の尾張藩や尾張徳川家が、どれだけ力を入れて再建させたかがうかがえますね。

本堂屋根の葵紋

その他にも敷地内では、大火の後に再建された鐘楼や二八二八（文政十一）年に建てられ、八角輪蔵（はっかりんぞう）（経典を収める回転式の書架）を内部に安置した経蔵など、江戸時代初期から後期にかけての建造物がみられます。また、葵紋の意匠が随所に施され、尾張徳川家の歴史の重みが感じられます。

名古屋の歴史を探訪される際は、ぜひ、建中寺を訪れてみてはいかがでしょうか。

IRODORI いろどり

「二葉御殿」は、福沢桃介の木曽川電力開発事業を支える邸宅でもありました。

今回は、貞奴と桃介が暮らした邸内の様子について紹介します。

二葉御殿の年中行事

二葉御殿では、桃介の誕生会、演芸会、園遊会、忘年会、新年宴会などの催しがどれも年中行事として大掛かりに行われていました。元旦には桃介の関係する会社の社員を全員招くので、福ゾーリという使い捨ての紙スリッパを何百足と用意したそうです。貞奴の指揮のもとに、福引の景品と、景品につける文句を幾通りとなく考えて作るのも小間使い一同の仕事でした。くす玉が割れクラッカーがはじける中で、その日は無礼講でしたが、小間使い一同は貞奴の采配に沿って数日前から徹夜で会の準備をしたそうです。

茶の間にて
仮装した桃介

桃介も折に触れ、仮装をして寸劇などを行いました。紹介の写真は二葉御殿での桃介です。場所は茶の間。現在の一階和室展示室3です。仮装した桃介が右手に持った箱の、後ろに写る柱をよく見ると節があります。同じ位置、同じ形の木の節が、展示室3に現存しています。

この柱は、およそ百年前の華やかな二葉御殿の行事を見守っていたのでした。

二葉館へお越しの際に、この桃介と同じ場所で、同じポーズの写真を撮るのも一興ですね。

年中行事を見守った現存する柱

---

from Archive 書庫棟から

芥川賞と直木賞

皆さんは、芥川賞、直木賞と聞くと、どのようなイメージが浮かびますか。「なんだかすごい文学の賞、難しそうな本の賞」などでしょうか。では、そもそも芥川賞、直木賞とはどんな賞なのでしょう。

芥川賞は、正式名称を「芥川龍之介賞」といい、大正から昭和初期を代表する作家・芥川龍之介の名前が付けられています。芥川龍之介は、『羅生門』や『河童』、『地獄変』など、数々の優れた文学作品を後世に残しました。そのため、芥川賞は文章の美しさや技巧を重んじる、純文学の作品から選考されます。

一方、直木賞の正式名称は「直木三十五（さんじゅうご）賞」といいます。直木三十五も大正から昭和初期の作家ですが、文学以外でも映画監督や脚本家として活動しました。ちなみに、本名は「植村宗一」といいます。直木三十五という特徴的な名前はペンネームで、31歳の頃に「直木三十二」と名乗って以来、毎年数を増やしていたのですが、36歳の年に「三十六計逃げるに如かず」と、ことわざになぞらえてからかわれるのが嫌になって三十五で止めたという逸話がありますよ。直木賞は、エンターテイメント性のある大衆文学の作品から選考されます。

城山三郎『総会屋錦城』
文藝春秋新社

大島真寿美『渦 妹背山婦女庭訓 魂結び』文藝春秋

芥川賞、直木賞は、文藝春秋の初代社長であり自身も作家だった菊池寛によって、昭和10年に創設されました。芥川も直木も「文藝春秋」創刊の頃から寄稿し、雑誌の人気と発展に大きく貢献しました。菊池は、友人でもあった二人の功績と早逝を悼んで、それぞれの名前の文学賞を創設したと言われています。

現在では、芥川賞、直木賞は、若手・中堅作家を評価する代表的な文学賞として、年に2回選考されています。

愛知にゆかりのある作家からも、第4回芥川賞の冨澤有為男をはじめ、戦後初の表彰となった第21回芥川賞の小谷剛や第40回直木賞の城山三郎、近年では、令和元年の第161回直木賞を受賞した大島真寿美など、多くの作家が受賞しています。

今秋の文学企画展では、名古屋ゆかりの芥川賞、直木賞を受賞した作家に注目し、その作品についてご紹介します。皆さんの読んでみたい郷土の作家や作品も見つかるかもしれません。ぜひ楽しみにしてください。